

大野一雄の舞踏について

— アルトシステムからの観察 <脚注> —

及川 廣 信 (演出家)

大野一雄の踊り

— 氏のレッスン法から —

大野一雄の踊りは、次のレッスン法から、氏が踊りに対してめざしているものを覗きみることができます。

氏は舞踏を志した者のなかでも、皮膚感覚を大切に考えた唯一の人でした。そのことが、氏が時代に先行したダンサーだったことを証明しています。

人間中心の踊りではないこと。じぶんは宇宙に生じているあらゆる有機物、無機物たちと同じ次元にいること。また、自分のからだの中には他の動物、植物たちが住んでいること。ただ自分が、このからだの形を偶然に与えられ、人間固有の機能を持って生きていて、からだのその規範を越えて、他の生物たちと共通するものを見出し、それと親しまなければいけない。

また外部的には、じぶんのからだ、宇宙との繋がりを求めるとき、氏が母親から教えられた、

“ひらめ”が事に驚いて舞い上がるときの姿に、“いのちのシンボル”を感じとっていたのです。

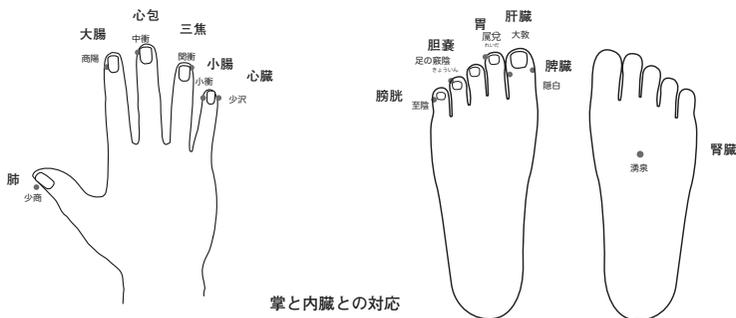
そして氏の舞踏経歴が高むにつれて、足から手の指の末端へと経絡が走っていることを感じ取り、からだの内・外に、内気と外気が通じ合っており、又からだの内部構造が、たとえば掌のなかに、フラクタル現象として縮小して映されていることなどを知ることができたのです。

それらのことを、後に『老子』を読むことによっても確認し、じぶんの踊りの在り方に確信が持てるようになったのではないのでしょうか。このように大野一雄の踊りの内側には、1本の発展の経路の筋道があったのですが、それが私が初めて氏に接した1957年時から中心的な方向性を失わなかったことが不思議ですが、そのことが大野一雄の偉大さでもあるのでしょうか。

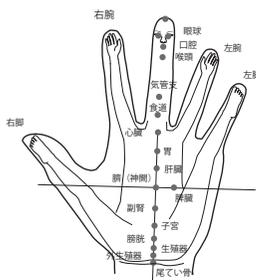
大野一雄の舞台が、あのようにサービス精神で盛り上がり、観る者が生きる喜びを与えられて帰ることができたのは、大野一雄は観客をじぶんの分身として捉えていたのではないのでしょうか。

図1. 手と足

各器官との対応



掌と内臓との対応



1 メソッドの方向性 — からだを自然にもどす

これまでのクラシックとモダンの踊りは、骨と筋肉で躍り、それに対して舞踏は体内の内臓器官で舞って地を踏む、と言われたのですが、大野一雄の踊りだけは皮膚と神経で踊っていたのです。

人間のからだはDNAの遺伝子によって、三つの胚葉から胎児の発育段階で、からだの作りが形成される仕組みになっていて、内胚葉が内臓器官を、外胚葉が皮膚と神経を、中胚葉が筋肉と骨を夫々つくり上げるのです。(図3)

また、「奇形八脈」というからだの基本構造を支える経絡があって、その中の上体を支える脚の部分の四脈をのぞいた後の四脈は、基体としての上体と図2のような構造をつくっています。

上体をこのように地球儀のように見立てると、地球の中心軸が“中(沖)脈”，前面の中心線が“任脈”，背面の中心線が“督脈”で、横に取り巻く赤道に当たるのが“帯脈”です。

これが人間の基体としての上体を支える基本的な気象の図で、後はエネルギーの気の流れとして、

陰陽の「12経絡」が足から手の指先へと走っているのです。

これらの発生学的な経路をたどって行くと、結局、人間の脳がセンターとして人間の躰ぜんたいの働きを管理しているのですが、大野一雄の踊りのばあいは、その歴史的な過程を逆に戻そうとしているのです。つまり、発生学的には最初の段階である、皮膚と皮膚下の神経の感覚を中心としているのです。

そのことは何を意味しているかと言いますと、皮膚は最初の生物の外界との接触膜で、五官は神経から分離発展したものなので、最初の次元に戻ることによって触覚と内側の情感が呼び起されるのです。そして、人間の意識下の無意識が形成される、それ以前の、混沌としたものから関係としての糸が紡ぐまれる最初の意識発祥の時点を探索しているのかもしれない。

これらがフランス哲学のジャック・デリダやジャン＝リュック・ナンシーの最新の研究対象と奇しくも同じ方向性をとっているのです。

図2. 奇形八脈（督脈、任脈、中脈、帯脈など）

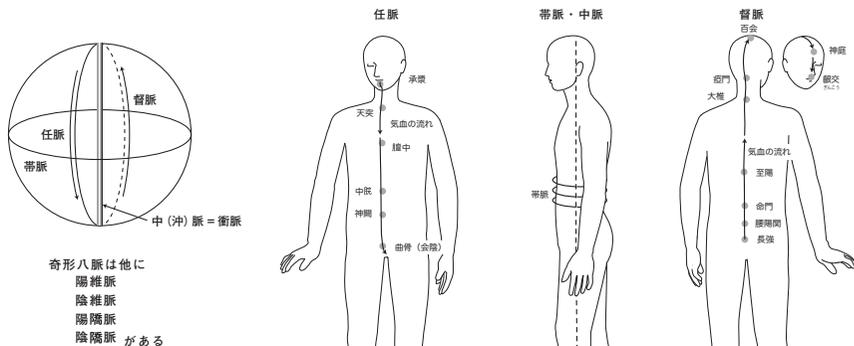
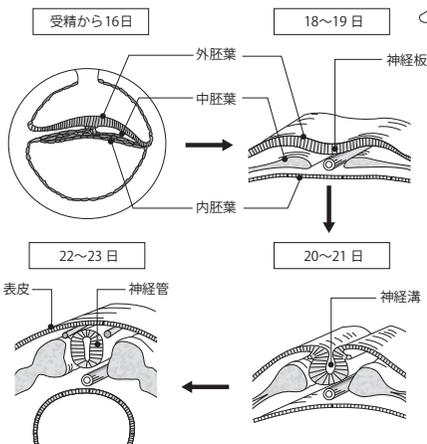


図3. 三胚葉、神経、皮膚、感覚器



《参考：経穴の効能》

- 承漿 = 顔面神経麻痺、三叉神経痛
- 天突 = 咳嗽、喘息、咽喉炎
- 膻中 = 胸焼け、咳嗽、喘息、嘔吐
- 中脘 = 胃腸の諸症状
- 神闕 = 臍あたりの腹痛、下痢、体力衰弱
- 曲骨 (会陰) = 月経異常、前立腺疾患

- 百会 = 頭痛、目眩、鼻づまり、てんかん、高血圧
- 神庭 = 頭痛、目眩、鼻や目の疾患
- 額交 = 唇炎、歯肉炎、歯痛、口臭
- 印門 = 失語症、脳性麻痺、鼻血
- 大椎 = 発熱、頭痛、感冒、
- 至陽 = 肋間神経痛、胃痛、胆嚢炎、胆石
- 命門 = 婦人病、座骨神経痛、早漏、ED
- 腰陽關 = 婦人病、座骨神経痛、早漏、ED
- 長強 = 痔、血便、早漏

2 植物になって踊ること

人は、＜人間的な地帯＞と＜動物的な地帯＞と、＜植物的な地帯＞の三要素を持っています。

＜人間的な地帯＞というのは、人は直立したことによって対象とからだの前面で対応するようになったため、人間が「知性」を持つことから、それが「智慧」となり、さらに心の奥の「神秘」も感じる動物となったのです。

また、様々なものと接することから「感覚的」な動物で、また「官能性」をもった動物でもある、と規定されております。この定義はヨーロッパだけでなく、日本も同じ考えを持っております。

ヨーロッパでは、まずレオナルド・ダ・ヴィンチが顔を三等分してそのことを提示しました。すなわち、額の生え際から眉間までが「知性地帯」、眉間から鼻の下までが「感覚地帯」、鼻の下から顎先までが「官能地帯」とします。これはダ・ヴィンチのネオ・プラトニズムから生まれたものです。

この原則を、19世紀にからだ全体に、また、“フ

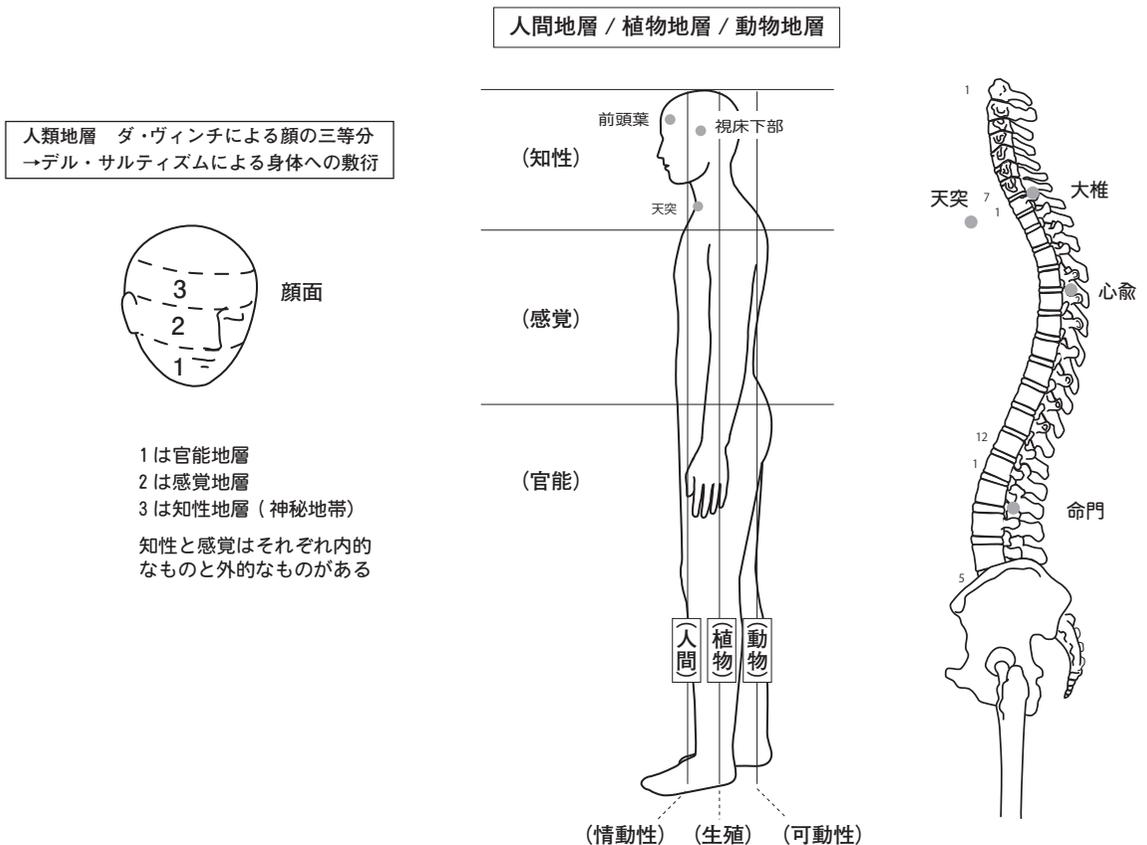
ラクタル”として上肢と下肢と上体にそれぞれ敷衍したのがデルサルティズムの仕事でした。これがアメリカの最初のモダンダンスと、フランスのエティエンヌ・ドゥクローの現代マイムの基礎にもなっているのです。

それに対して、日本の伝統芸能では、この法則がよく適合しています。能楽は人間の「神秘性」を、歌舞伎は「感覚性」を、日本舞踊は「官能性」を主体とした芸術です。このような芸術は、世界の中でも日本だけに、その典型として遺されているのです。

次に、＜動物的な地帯＞ですが、動物性を主体にした踊りは、コンテンポラリーダンスの動きを主体とした踊りがそれに相応します。

お臍のちょうど真裏の箇所が“命門”というツボに相応し、そこに腎臓のエネルギーが注がれ、それを基点に、上下に動きがはたらいて行くのです。動きは、ただ動くということだけでなく、その動くエネルギーが生命的なものに繋がり、さらに深部へと導くことができるのです。

図4. 身体の内面図



3 “一” から生み出されるもの

さて、問題の＜植物的な地帯＞ですが、これは意識下の不随的な部分です。そこに触れて、“気づき (awareness)” の段階までもって行こうとしたのが、大野一雄のダンスです。それには、“呼吸”と“経絡”と“ツボ”によるほかないのでしょうが、それ以前に宇宙と自分のからだが交流することが最初の条件なのです。

大野一雄がとくべつに使っていた“ツボ”は、胸椎の5番目の椎骨の下で、胸の“心臓センター”と頭部の中心にある“視床下部”とを結びつける中心的な箇所です。又、喉の「天突」の部分と、手の指から入った気の流れが顔の目と耳の周辺に向うとき、経路として必ず通らなくてはいけない“ツボ”が、頸椎の第7椎骨の下にある「大椎」です。これらが植物的な機能を動かすキーであることを、大野一雄の踊りは知っていたのです。

“易経”は、人間の時間的関わりについての予測を問題にしています。その秘密の構造がそのまま自分の「仙骨」のなかに描かれているとしたら、どうということになるか。

そして、それを自ら感じとることが出来るためには、この「仙骨」の八つの穴の状態を自分の掌に反映させるため、呼吸と気の流れの訓練が必要なのです。それが“易経”の「八卦」と通じるのです。

大事なことは、天の“陽”の気は右廻りの螺旋を描きながら、頭頂から下方に向かって降りて来て、それに対する地の“陰”の気は、左廻りの螺旋で足の裏から上に昇ってくる。そして、この“陰”と“陽”の気の流れは、仙骨の上から2番目の左右相對する2つの穴の処で遭遇するのです。

それに対する空間の問題は、“風水”の役割なのです。東西南北の方位が大事なことは勿論ですが、“五運”という地上に対する天からの気の働きがあります。気象が変化するように、この五つの運氣が四面のどこかに変幻して集結し、それが自分のキャラクターとその時の自分の状態に及ぼす影響を感じとるのです。それは近世の能楽者の世阿弥が既に行なっていたことでもあるのですが、

この能力は皮膚と耳の周辺で捉えるほかないのかもしれませんが、それはあまりにも微細な感覚なので、かなりの修練を必要とします。

図5. 仙骨の八仙洞

八仙洞から自然界の諸力を吸収することが出来る

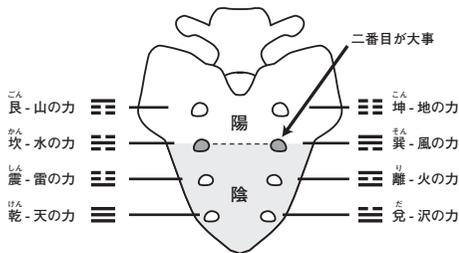
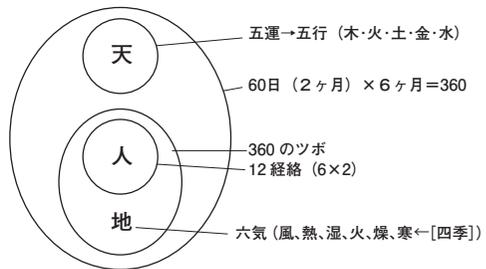


図6. 天, 人, 地

《五運六氣》



五行が陰陽の二を、それぞれ (三陰、三陽) に変える。

図7. 五行対照表

五行	五化	五色	五味	五臓	五腑	五体	五官	五声
木	生	青	酸	肝	胆	筋	目	呼
火	長	赤	苦	心	小腸	脈	舌	笑
土	化	黄	甘	脾	胃	肉	口	歌
金	収	白	辛	肺	大腸	皮毛	鼻	哭
水	蔵	黒	鹹	腎	膀胱	骨	耳	呻

結論：新しいメソッドとテクノロジー

このように大野一雄の踊りのテクノロジーは、普通のダンスのテクノロジーでないで、じぶんのからだの状態をじっくり眺め、健康の時よりも、風邪を引いたときか、どこか工合の悪いとき、床に伏しながら、からだをゆっくり動かしポーズを変えながら、内部の器官の微妙な変化と、からだの“ツボ”の効果を感じとり、器官の機能を変革する技術を自ら発見、会得してゆく外ないのです。

それは、正しい方向、方法論の中で、他人に教えられるというより、みずから実感として発見、習得してゆくものです。

新しいテクノロジーというのは、体の器官の機能を変える技術です。それには、“経絡”と“ツボ”と“血脈”を意識化することですが、それを動かす技術は“呼吸”と“筋肉”です。ただ、これまでとは違って宇宙的な観点から「逆作用」の法則でそれらを使うのです。

なぜ逆作用になるのか、それは人間を主体でなく、宇宙の力の方を主体としてみる目も持つことです。自我をつよく持ちながらも、宇宙現象のなかの事実としてそれを確認するためには、大野一雄のように皮膚と皮膚下の神経から内・外の関係を捉えて行くことで始めない限り、そこが開かれてゆかないようです。

<脚注> アントナン・アルトーの演技論と大野一雄の踊りは深い繋がりががあります。まず大野一雄の晩年の踊りは「老子」からの影響がひじょうに強く、その「老子」の内容は“気功”の流れを知っているものでないと、その

意味を体から理解できないのです。そして「氣の流れ」を踊りの本質とする大野一雄が「老子」を“座右の書”としていたのはそこに理由があるのです。

つまり、人間の歴史的経験の記憶は、仙骨の八つの穴に仕舞われているのです。それは人類が立ち上がって外界と手で触れて来たのですが、その経験が掌から丹田を通じて仙骨に蓄積されているのです。結果として、尾骨と八つの仙骨裂孔は開かれて“易”の八卦と同様に、宇宙の運動と合一しながらその人の生きることの時間的なプロセスを知らせてくれるわけです。この説明は大野一雄の掌と腰の引き方の演技から容易に納得されることでしよう。

では、それがアルトーとどういう関係にあるかということ、アルトーははやくも、中国の経絡とツボの未来性に気付いていたのです。そして経絡は「気血」と直接関係があり、からだの器官を動かすものです。器官はそれぞれで「機能」の働きをするものです。アルトーの「器官なき身体」とは、その意味で連結の働きとしての機能の繋がりを換えればいいということになるのです。それには「気血」を動かす呼吸と筋肉の“逆作用”によって機能の変換をするほかないのです。そのことをアルトーはユダヤの密教のカバラからヒントを得たのですが、そのことはなにもカバラに限らず、老子、空海も同じような秘密の技法を持っているのです。つまり、「無極」の神聖とつながる為には秘密の技法を必要とする、ということなのです。

大野一雄の踊り

----- 氏のレッスン法から -----

- 1) 目を閉じて、からだ全面の皮膚で周りの空気を感じながら、ゆっくりと前へすすむ。
—— 随意筋から不随意筋に働きかけ、皮膚のうえに各種のクオリアを感じとる。
- 2) 動物、魚、植物、あるいは雲や机などになる。
—— たとえば、馬になったとする。そのばあいは、馬の首筋と背のうごき、脚の運びなど、機能の違いから馬の心と感受性を知る。
- 3) 海底の砂に埋もれる“ひらめ”が、突然の刺激に驚き「舞いあがる姿」。それが踊りのほんとうの姿。
—— これは、氏が母親から教えられたもの。
- 4) 大野一雄の脚と手
地の上に立つこと、そして踏むこと。ちょうど車がハンドルによって操作されるように、氏のばあいは、掌と指の作用によってからだの器官の機能を働かせる。
—— からだの内と外の気、宇宙とのコレスポンド。

メソッドの方向性

----- からだを自然にもどす -----

- 1 大脳科学が対象としているものを、ネオ ダーウィニズム（ダーウィンの進化+メンデルの遺伝）と“神経生物学”の観点から、皮膚の上の生物と環境との関わり次元にもどること → ギブソンの「アフォーダンス」

—— 本来、生物が環境のなかで、からだの各部分の関わりで動くことが体を変形し、脳の組織もつくって来た。それゆえ、人間と各の動物、鳥類とは、それぞれ異なった体形、脳システムと感性を持っていることになる。

- a) 皮膚から大脳へ。神経は“伝達”と“知覚”の2つの道をとる
イ) 皮膚→神経-伝達→神経網→意識→大脳
ロ) 皮膚→神経-知覚→感覚→五官（眼・耳・鼻・舌・身）→大脳
b) からだの動きと周りとの関わりを、ちよくせつ皮膚のうえで知覚し判断する
イ) (皮膚の) 触覚←(五臓の) 臓識←(大脳の) 元識
ロ) 皮膚の上に五感の分布図が置かれる

----- 植物になって踊ること -----

- 2 「人間は逆さになって生きている」とバタイユは言っている。これまでの踊りは骨と筋肉を中心的に使い、呼吸によって調整していたが、体内器官の新たな機能転換（これは呼吸と筋肉の逆作用による）と、皮膚と神経を中心的に使って踊ることになる。

—— これは人間の「植物的ゾーン」の、“気”または“素粒子”で踊ることになる。

ここで解剖学的に器官と機能以前の、細胞と組織の形成のプロセスと合わせて“形態”と“胚葉”が問題となる。

- a) 三胚葉
イ) 内胚葉 = 五臓六腑, 呼吸器官, 循環器官, 消化器官
ロ) 外胚葉 = 皮膚, 神経
ハ) 中胚葉 = 骨, 筋肉
b) 身体の三つのゾーン
イ) 人間的エリア = からだの前面 知性地帯 / 感覚地帯 / 官能地帯
ロ) 動物的エリア = 背骨を中心とする動力 おへその真裏の“名門”とそれに働く腎臓
ハ) 植物的エリア = 細胞の組織構造以前の細胞, 淋巴, 神経の伝達ホルモン

----- いち から生み出すもの -----

- 3 老子は、タオ（道）について「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。万物は陰を負いて陽を抱き、冲気を以て和と為す。」と述べている。

—— このばあい、二は陰陽のこと、三は三陰・三陽のこと。万物のひとつとして人間は、地からの陰を背負い、太陽からの陽を前面に下ろして腹部に収める。足の“湧泉”から昇った冲脈は“会陰”に至って、そこから体の中心軸をつくり、背の“陰”のはたらきと前部の“陽”の働きとのバランスを計ることになる。

- a) 「天・人・地」の関係
b) 五運六気 = 五行（木・火・土・金・水）と六気（風, 熱, 湿, 火, 燥, 寒 ← [四季]）

《参考文献》

- 『脳から心へ 一心の進化の生物学』・M・エーデルマン 金子隆芳訳 新曜社, 1995
『タオ自然学 一現代物理学の先端から 東洋の世紀 がはじまる』F・カプラー 吉福伸逸+田中三彦+島田裕巳+中山直子 訳 工作社, 1979
『脳のなかの幽霊』V・S・ラマチャンドラン / サンドラ・ブレクスリー 山下篤子訳 角川文庫 角川書店, 2011
『動物と形態学と進化』E・S・ラッセル 坂井建雄訳 三省堂, 1993
『アフォーダンス入門 一知性はどこに生まれるか』佐々木正人 講談社学芸文庫 講談社, 2008
『皇帝内経運氣 一古代中国の気象医学とバイオリズム』李 建章編 身心古典翻訳同人訳 ベースボール・マガジン社, 1997
『老子 一気功で読み解く』廖 赤陽 春秋社, 2009